拓殖大学北海道短期大学研究紀要 第 4 号：54-56（2024）

―――― 書　　評 ――――

ごまかさないクラシック音楽
岡田暁生・片山杜秀（著者）

2023 年発行，新潮選書，352 頁，2,090 円（税別）

特にクラシック音楽作品をありのままに受け取ってその甘い旋律に浸ったり、あるいは音楽に備わっている力に鼓舞されることで背中を押されるなどの感覚をいだくのは、恐らく多くの聴き手が原体験として持っていることだろう。しかしその音楽作品とは、表象的に聴こえるそこでの音群が果たしてそのすべてなのだろうか。

音楽の字義どおりに「音を楽しむ」という営為に身を委ねるだけではこのような疑問を差し挟むこともないだろうが、音楽をそう受け止める聴き手には穿ち過ぎとも映りかねない問いに対して、ここでは二人の音楽学者が広範な社会情勢を踏まえた各々の切り口によって指摘し、それが帰納的に当該問題を掘り下げるという道筋を辿る。とはいっても、冒頭から疑義を呈して問題点を突きつけるわけではない。これまでにもよく見られた、時系列に沿って作曲家や作品の系譜を追う作業の再生の体で始められる章もあり、いたずらに不穏だったり、何かあるのかもしれないとの思わせぶりな身振りとは、どの章の冒頭ともに無縁である。しかしそこから大きく逸脱するかのように、話題は時に当時の階級制度に遷移し、時に時空を越えて現代の風俗とシンクロさせるなどして問題点に斬り込む。一見、突発的とも思えるほどのそれらの事項が他の事項を更に呼び込むこともあり、またこのあとどのような着地を試みるのかとの懸念をいだかせることもありながら、最終的にはそれら一つひとつが重要な要因となって本来の問題に収斂し帰結する。

この手法はおそらく意図されたものではないだろう。雑多にも思われる様々な事項を繰り出し続けている様相でもありながら、実はそれらがすべて落としどころを踏まえている点に驚かされる。言い換えれば、自分ひとりで話題提供者も兼ねながら進めていくのならいざ知らず、対談の形式の中で相手がどの方向に投げてきた球でも、それを自分の型を以て捉えるという処理だけでなく、そのあと更に予想を超えるような球を投げ返すというキャッチボールを繰り返しながらも、それでいて最後には当初の問題に行き着かせて成立している点である。これはあたかも、先に結論という磁場があって、すべての事項はそこに引きつけられているという図式が、なにやら予め設定されているのかとも見紛うような行程が構築されているのである。

また他のくだりで印象づけられるのは、二人がともに音楽を神格化していない視座を持っている点である。

クラシック音楽の基本的な概念では、バロック時代からが整備された音楽としての地位を築いたとの見方が一般的なため、申し訳程度にバロックに触れる一部を除いた多くの音楽史のテキストも、これに沿うようにして本章をバロックから始めるものが少なくない。

だが本書では、そもそもバロック以前の中世やルネッサンスの項にそれなりの紙幅を費やして始めている。それは、中世やルネッサンスでの言及が、最終章で「現代という時代に於ける中世性」というテーマで語られるための壮大な伏線にもなるからなのだが、そのことに読み手は最終章に差しかかってようやく気づかされるのである。ここでは、これまで教条

的とも形容し得るような内容のテキストではある意味で軽視されてきていた時代であっても、それも取り上げることで巨大な循環を以て現代へと連なっている点を指摘する。つまり、人為的に線引きされた各時代の区分という特定のカテゴライズに拘泥するのではなく、巨視的な視座から各時代とそこでの音楽を還元的に俯瞰するのである。つまり、様々な事項をパラレルに扱う中で音楽もそこに位置づけさせ、そこでの音楽の果たすことのできる役割を問うているという姿勢なのである。

クラシック音楽に於ける「慣習性」はクラシック音楽界の随所で認められることであるが、その多くは幾重もの変遷の末に辿り着いた折衷案である。この点に於いては、本来的な姿がその後歪曲され、慣習化され、定着するというプロセスを経て現代のクラシック音楽のあり方として差し出されていると斬り込む。確かにそこでは、「音楽は時代を映しだす鏡」という文言が表すように、社会情勢の移り変わりに呼応して、その時代時代の作曲家もその作品もが変化を遂げていることが明らかであり、それが現代では十把ひとからげで演奏会の俎上に乗せられ、どの時代も同等に扱われるのが現状である。著者たちはこの風潮を、行き過ぎた情報共有の弊害と断罪し、更に、正統と異端のような相反する二者の相剋も生みにくくさせているとも言明する。思えば音楽こそは、対立や対比の原理を根幹とする芸術であったはずだ。現代はそれなりに合理性が獲得されてはいるものの、譲歩された場所で慣習として根づいたり、なによりも平衡性が主眼とされがちな趨勢にあっては、音楽本位というテーマからは遠ざかってしまうのではないか。それが現代という時代であるとの認識が促されているかについては考えさせられる。

「音楽に国境はない」とよく言われる。それはクラシック音楽を形作った西欧の音楽語法が 19 世紀頃までに、それまでどの国でも連綿と受け継がれてきた各国のローカルな語法を駆逐してどの国に於いても君臨し、それによってクラシック音楽こそが国境を越える万国共通語のように認識されているからである。一方でクラシック音楽に限らず音楽全般に言えるのは、その持てる抽象性である。二人は、何らかの訴えを主張する際に、音楽は直接的な手法に依拠することなく表明する手段として用いられる点を指摘する。それはかつてハンスリック(音楽評論 1854)が、人々が音楽に浸潤させられる局面について、「音楽が感情を表しているのではなく、感情を揺さぶる音高の連なりの類型が使われている」という旨で断じたのとはまた異なるアプローチによっている。だから、それを受け止める人いかんでいかようにも印象を変えることを目的としても使われてきたし、またはキリスト教の典礼で音楽が用いられてきたように、祭事とセットにすることで広大な周知性に寄与する。よって著者たちは、音楽は抽象的であるがゆえの洗脳性を持っているのであり、武力行使などよりもよほど浸透力が強い点を、これまでに該当するいくつもの例を引きつつ警鐘を鳴らす。平たく言えば、音楽との距離を一定程度とっていなければ、たちまち音楽という渦に呑み込まれてしまうと言わんばかりなのだが、これは先にも触れたように、著者たちが音楽を過度に神聖視していないスタンスを持っていることの何よりの証左だろう。よってここでの指摘は、音楽の力を信じて疑うことがなかったり、あるいは無邪気に嗜好品と認識したり、または空気の振動で形成された音の連なりや重なりでできた刹那的な側面に陶然としがちな聴き手にとっては、耳が痛い苦言ともなるものの、同時に新しい地平に開眼させられる契機ともなるのではないだろうか。

そういえばと裏表紙を返してみれば、果たして「入門書」の文言が確認できる。しかし本書が手垢のついた内容を改めてなぞるものにとどまっていないことは、これまで述べてき

たとおりである。その意味では、冒頭に触れたような「穿っている」との印象も、確かに刻印しかねないのかもしれない。

（保育学科　木村貴紀）